名古屋女子大学　紀要　57（人・社）303～316　2011

スポーツ集団における「秘密」の位置づけに関する社会学的研究

清水　一巳

A Sociological Study about the Significance of “the Secret” in the Sports Group

Kazumi SHIMIZU

１．はじめに

子どものスポーツ参与に関連して、「体力・運動能力の低下とともに二極化ならびにハードトレーニングにともなうさまざまな弊害（青少年スポーツライフデータ2010）」が指摘されてきている。2009年に実施された笹川スポーツ財団の調査によると、「スポーツを行わなかった理由」として、「『時間がないから』をあげた者が45.6％と最も多く、次いで『運動・スポーツより他にしたいことがあるから』22.5％、『面倒だから』20.9％、『疲れるから』20.6％、『勉強や習いごとで忙しいから』19.8％」という理由があげられている。このように、『時間がないから』という理由が非実施者の約半数に及ぶことから、現在の子どもの忙しさをみてとることができる。NHK国民生活時間調査（2005）では、2002年度から、全国の公立学校で実施された完全週５日制をうけて、学生の「学業」の実施時間は、土曜日では３時間21分（2000年）から１時間49分（2005年）へと減少しているが、平日で６時間00分（2000年）から６時間28分（2005年）へと増加している。そのことから、「『土曜を完全な休みにすると、平日にその皺寄せがくる』という現象」が起こっているとの指摘がなされている。

しかし、子どもの体力の低下問題や二極化問題を引き起こしているのは、「子どもの忙しさ」によるものなのだろうか。「スポーツを行わなかった理由」で時間問題の次に多かったのが「運動・スポーツより他にしたいことがあるから」というものであり、次いで「面倒だから」、「疲れるから」という理由であった。これらは、いずれも「スポーツ」のもつ特性、あるいはスポーツ環境の持つ特性に向けられたものと考えることができるのではないだろうか。

本研究では、この「スポーツより他にしたいことがある」というような他活動との比較や「面倒」、「疲れる」といったスポーツ活動自体の経験から形成されるスポーツ活動への意味づけを「スポーツ（活動）の認識」として捉え焦点をあてていく。

２．研究の目的

本研究では、子どものスポーツ集団のもつ「特性（意味）」について検討を行う。学校教育（学校集団）および家族集団、仲間集団、地域集団といった関係をとおして「スポーツ」が捉えられるとき、スポーツ集団内の関係構造の変化により、スポーツの意味が形成されることになる。そこでの関係構造に焦点化し、スポーツの明示性と非明示性（秘密）という視点による「スポーツの意味」の獲得過程への分析可能性を検討する。

今回の報告では、まず、スポーツ集団の関係の中でも、集団内に存在する「秘密」に着目し、

スポーツ集団の関係構造との関連から有効な視点となりうるのか検討していく。

ホイジンガ（1988：40）は、遊びという特殊世界について、「遊びの例外的な立場と特殊な位置は、それが何か秘密の雰囲気に取り巻かれていることを好むという、特色あるあり方の中に示されている」と指摘する。また、西村（2005）は「遊びという、独特の行動様式におけるエートスというものがあるとすれば、それは、行動一般に関わる倫理的なフェアな精神ではなく、遊び行動をまさによい遊びとして構造化するふるまいである」という。つまり、よい遊びとして構造化される過程において「秘密」の雰囲気が生成、維持され遊びの特殊性を保つことになるのである。

「スポーツは遊びを最終目的とする」という西山（2006）の見解をとるまでもなく、スポーツは遊びの要素をもつ活動である。ならば、スポーツの意味が伝達され、過度な強調や拒絶という二極化の状態にある子どものスポーツにおいて、この遊びの特殊性を保つ「秘密」の存在について分析することは有意な視点であると考える。そこで、先の遊びにおける「秘密」の意味を手がかりとして、スポーツ集団において「秘密」の雰囲気が生成される関係性が存在するのか明らかにすることを本研究の目的とする。

３．分析枠組み

１）集団特性としての「秘密」の検討

遊びは、そこに「何か秘密の雰囲気」（ホイジンガ）がかかわることにより、他の世界と異なる特殊な世界が形成されることになる。

秘密とは､「①かくして人に知らせないこと。また､その内容。②真言の教え。密教。③密意。仏が理由あって秘した教え」（広辞苑）とされる。「人に知らせない」､「教え」､「秘した教え」というように、知らせる、教えるという人と人とのつながりの状態、あるいは、そこで伝えられる（伝えられない）事柄を指しているものと捉える事ができる。これをひとつの社会的形式としてとらえ、詳細な検討を行ったのが、ゲオルグ・ジンメルである。

ジンメルは、社会の特徴を社会関係のあり方の違いとして論じており､「社会の歴史的な発展を多くの部分において特色づけるのは、以前の公然たるものが秘密という避難場所へ入りこむということであり､そして逆に以前の秘められたことがこの避難所なしにすますことができ、公表されるということである（ジンメル，2006）」と述べている。この秘められていることと公然たるものが、連続性を持って位置を入れ替える過程において集団の発展が見込まれるといえる。

このような､秘密と公然たるものの連続した入れ替わりを､武道の世界にみることができる。

「射手はいろんな動作を行うにもかかわらず、常に不動の中となることが眼目なのである。そしてその時最大にして最後のことが現れてくる。すなわち術は術のない術となり、射ることは射ないこと、言い換えれば弓矢なしで射ることとなる。さらに師範は再び弟子となり、大家は初心者に､終局は発端に､そして発端はすなわち完成となるのである」(オイゲン・ヘリゲル)

ここでいう公然としてある術が、術のない術という「秘密」を帯びたものへと移り、師範が弟子となり、大家が初心者となるときにも、それまで公然としてあるものが､「秘密」を帯びてくることとなる。ヘリゲル（2002）はこの繰り返しを禅の予備門と位置付け、禅への洞察は「あたかも禅がより深い侵入に反抗するかのように、なにかありそうだと予感しつつ探りにゆ

く自己移入は、二、三歩進むと早くも克服し難い障害に突き当たる」ものだと説明している。そこに「秘密」の位置づけを見て取ることができる。

2）「秘密」と意味の伝達

亀山（2001：211）は、ジンメルの秘密論を参考に、「秘密とはコミュニケーション活動の一つの様式である」と捉え、「秘密は、分離と結合という相反する二つの契機を調停し、同時に成立させる働きを有している」点に着目している。子どもたちは、「自己の内面に生ずる〈聖なるもの＝魂〉」を守ることにより、内面化し、「他から見られる〈外面〉とは異質な〈内面〉を所有すること」が可能となるという。このことは「〈見えること〉と〈在ること〉の二重性の現実」と言い換えることができるという。そして、子どもの発達に関して、「子どもたちが自律的になりうるのは、人間に必然的なこの二重的存在様式が形成されることによってである」との見方を示している。

われわれの日常生活における知識は、様々なコミュニケーション（社会関係）により獲得されており、その一様式として「秘密」が存在することで、子どもたちは自律的になりうるのである。この秘密の存在は、シュッツ（1997）のいう「日常的思考」における違和性が生じた状態としてとらえることができる。そこでは、「今まで未知な、そのためわれわれの日常的知識の秩序外に存在するような事柄に出会えば、われわれは探索過程を開始する」（シュッツ, 1997：22）ことになる。この生活世界における一般解釈図式を整える過程における他所者（新参者）が他所者であることを知る契機の一つとして、秘密という形式や秘密を維持している集団の関係性（経験、知識）というものを位置づけることができる。

スポーツ集団において新参者（子ども）が「秘密」に出会うとき、そこで形成、維持されている関係性は独自の秩序（形式）をもっているといえる。ここで、「秘密」を社会の形式として説明するジンメルの論点は、集団における意味の伝達－獲得過程を分析する上で重要な示唆を与えてくれる。（以下[カッコ]内頁は、ジンメル, 居安正訳,『社会学（上巻）』, 2006, 白水社）

Ⅰ．秘密の存在について

「われわれの生活要素の形象において明瞭さと不明瞭さの一定の割合をも必要とする。われわれが底の底まで明白に見通したものは、まさにそれによってわれわれにその魅惑の限界を示し、想像力がその可能性をそこにつくりだすことを禁じ、いかなる現実もその損失をわれわれに償うことはできない」[pp.369-361]

「秘密は、公然たる世界とならぶ第二の世界のいわば可能性をあたえ、そしてその公然たる世界は、この第二の世界の可能性によって極めて強く影響される」[p.371]

「二人の人間あるいは二つの集団のあいだのあらゆる関係は、そこに秘密が存在するか否か、さらに秘密がどれほど存在するかの問題によって性格づけられる」[p.371]

人と人との関係において、明らかであることと明らかではないこととの割合が一定程度保たれることにより、その関係（集団）の魅力が高く保たれるということである。そして、この明瞭さと不明瞭さの関係について、「最初は意識して遂行されたことが無意識的・機械的な習慣へ下降し、そして他方では以前の無意識的・本能的なことが意識の明るみへと上昇するという

ことである」とされ、公然たるものと秘密との連続性は、その関係における社会化の過程として捉える事が出来る。これは、ヘリゲルの「師範は再び弟子となり、大家は初心者に、終局は発端に、」というときの関係に見て取ることができる。

Ⅱ．秘密と報酬の価値

「（高貴な心をもつ）彼は彼の最高のものが賞賛や報酬によって支払われないように、まさにそれを隠蔽する。というのもそれが支払われれば、それによって人はいわば代償を所有するが、しかし本来の価値そのものをもはや所有しなくなるからである」[p.372]

言い換えると、スポーツの中での「技」を結果と結び付け賞賛や報酬を受けることをせずに、そのことで、ひとつの「技」と位置付け、さらなる「技」の習得へと結び付けることになる。「術は術のない術となり、射ることは射ないこと、言い換えれば弓矢なしで射ることとなる」というヘリゲルの説明に、この価値を位置づけ得ることができる。

Ⅲ．秘密の魅力

「秘密のこの魅力と独特の仕方で結び付くのが、その論理的な対立物、漏洩の魅力である」[p.374]

「秘密は人びとのあいだに限界をもうけるが、しかし、同時に漏洩あるいは告白によってその限界を破るという魅惑的な刺激をもあたえる」[p.374]

「人間のあいだのいっさいの関係は、いかほどに秘密がそこに、あるいはそれをめぐって存在するかに、そのひとつの特性化を示す。してみれば関係のいっそうの発展はこの点においては、秘密を固持するエネルギーとそれをなおざりにするエネルギーとの混合の度合いによって規定される」[P.375]

「より成熟したより大きな状況においては支配領域の拡大によって、技術の客観性によって、あらゆる個人からの距離によって、確実性と威厳とが公的な利益の担い手のものとなり、その両者が彼らを彼らの振る舞いの公開性に耐えさせる」[P.377]

秘密が守られることと、その漏洩との関係は表裏の関係にある。スポーツ技術でも一部の技術を獲得し、その限界を感じる頃に、新たな方向へと視野が広がるためには、熟練者あるいは、技術の上位者からの新たな技術の方法という情報の伝達（漏洩）が重要になってくる。ヘリゲルの弓射が放れの番になったとき、師範が弓を引絞って射たのをみて「少しの身体の動揺をも伴わなかったことを、もはや見逃すわけにはいかなかった」として体の使い方（情報）を獲得している。これは、師範がヘリゲルの弓射を見て、「今や新しい、特にむずかしい課題の前に立って」いることを見極めたことにより、伝えられ（漏洩され）たものだといえる。

Ⅳ．秘密と個人的な分化状況

「秘密の社会学的な役割を規定するこれらのすべての契機は、個人的な性質をもっている。しかし人格の素質と複雑さが秘密を形成する程度は、同時にまたその人格の生活が置かれてい

る社会構造にも依存している」[p.375]

「強い個人的な分化状況の社会的な状態は、高い程度において秘密を許し、さらにそれを要求する」[p.375]

「逆に秘密は、そのような分化状況を支え、さらにそれを高める」[p.375]

秘密は個人主義化の契機であるが、圏が広くなるにつれ、以前には達せられなかった秘事が可能となるという。つまり、人間の共存は、一定の程度の秘密を必要とし、「秘密は、ひとつの対象を捨て去ることによって他の対象をとらえ、この交換のもとにおいて変わらざる量を維持する」（ジンメルp.376）というのである。

Ⅴ．公的、私的な秘密

「他者たちの意識から後退して隠蔽されるものが、他者たちの意識においてまさしく強調され、そして主体はまさに、彼が彼らの前でおおい隠したものによって、とくに注目に値するものとしてあらわれる」[p.378]

「装身具は、超個人的なものによって個人を拡大させるはずであり、この超個人的なものがすべての者に接近し、すべての者によって受け入れられ評価されるとすれば、装身具はそのたんなる実質的作用の彼方に様式をもたなければならない」[p.382]

「様式は常に普遍的なものであり、これが個人的な生活と創造との内容を、多数者によって分有され多数者の近づくことのできる形式へともたらす」[p.382]

ここから、スポーツの技術の公的な側面と私的な側面への視点を取ることができる。身につけるものとしてのスポーツ技術は、他者から特異なものとして捉えられるとき、魅力的なものとしてとらえられることになるが、同時にそれは、スポーツ活動の中で他者に受け入れられる合目的的なものでなければならない。

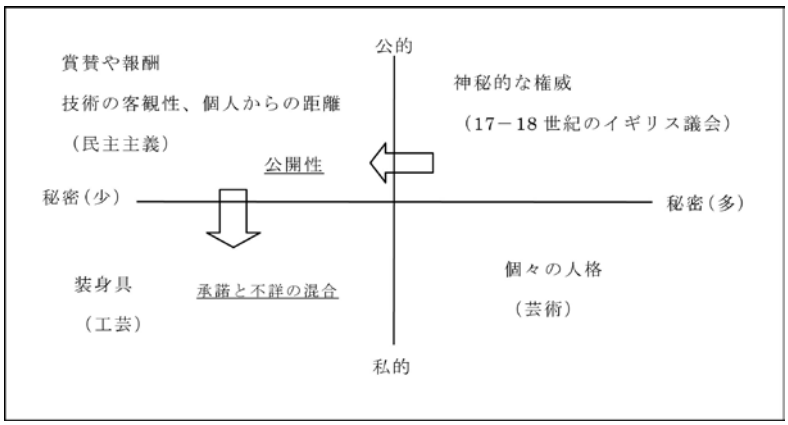

図１　秘密の存在と公私の関係

これまでの、秘密への検討をまとめると、①秘密の割合が一定程度保たれることにより、その関係（集団）の魅力が高く保たれる。②公然たるものと秘密とは連続性しており、社会化の過程として捉える事が出来る。③賞賛や報酬にたいして、最高のものは隠蔽される。④関係の発展は、秘密と漏洩の度合いによって規定される。⑤秘密を形成する程度は、社会構造にも依存しており、人間の共存は、一定の程度の秘密を必要とする。⑥他者から特異なものとして捉えられるとき魅力的なものとしてとらえられる。

３）スポーツ集団における技術と関係性

スポーツ集団における意味の伝達が行われる場合、スポーツの中での意味の伝達とスポーツの外での意味の伝達の二つの側面から考えることができる。まず、前者の場合、その伝達手段としてスポーツ技術を挙げることができる。

スポーツ技術とは、「定型化され、世代から世代へと伝達される、状態（ヘクシス）としての複合的行動様式である」（菅原p.36）とされる。つまり、一定の型が形成され、人から人へと伝達される型であるということができる。荒井(2003)はスポーツ空間論としてコート（スポーツ）の中では、「単一の、しかもプレイヤーが納得したルール（規則）があることであり、アカウンタビリティ、説明責任がクリアである（p.64)」として、フェアな競争があるとしている。ここにある関係は「納得したルール（規則)」により形成されており、他者（もしくは自分）との闘い、競い合いという関係性はスポーツ技術により、支えられたものとなる。

それに対して、スポーツの外での意味の伝達には実社会の関係性、いわゆる「日常社会のロール（役割)」によって意味の伝達がなされているとみることができる。この側面においては、子どものスポーツ集団での関係性として、「親－子」、「兄－弟、姉－妹」「指導者－保護者」などの役割の重なりあいを挙げることができる。また、スポーツ集団内での役割にも、「レギュラーと非レギュラー」、「監督・コーチとクラブ員」、「先輩と後輩」といった役割の重なりあいが考えられる。

次に、学校運動部を例にとり、集団内における関係性とスポーツ技術への視点から「秘密」の位置づけについて検討を行う。

４．集団構造の歴史的変遷

１）学校運動部の構造

①明治初期～大正期（技術の習得による役割の獲得）

日本において、西洋から最初にスポーツが持ち込まれた場は、学校であった。当初は、スポーツは素朴な楽しみであり、そこで支配的な価値は「遊戯性」であった。しかし、スポーツが学校を通して普及していく過程で、「遊戯」としての意味は薄れ、代わって技術の向上に、より価値が置かれるようになってきた。ここでは、野球を例にとって、その過程を見ていく。

我が国に野球が輸入された当初の野球は、裕福な家庭出身の書生たちの間で、一時的な楽しみを求めるハイカラな遊戯と見なされており、彼らは夢中になってそれを楽しんでいたという（菊 1993：49)。また、ウィルソンが校庭で学生に野球を教えたのも、日本人の体格が貧弱なのを心配し、どんなスポーツでもいいから、教室の外へ連れ出し、運動好きにさせ、外気に触れる機会を多くしようとしたことからであった。この頃には、野球の他にもLawn Tennisや、「バッテラ」と呼ばれたボート、さらにはFoot Ballも紹介されているが、それらも野球と同じように、「運動遊び」の形態をとっていた（日下 1996：27)。

この当時の野球技術に関して、「カーブを投げる技術はこのころからすでに存在していたが、当時はごく一部の者だけの特技にあるにすぎなかった」（日下：86）、「９ボールの当時は、バッテリーも定まっておらず、一般に技量が優れているものがこれらの任にあたった」（日下：86）というように技術を身につけることは個人特性によるところが大きかった。また、その身につけた技術により、スポーツ活動における役割が分化していたと考えられる。

この時期の、スポーツ技術は個人の特性（身体特性、経験）によって獲得の度合いが異なり、さらに、その技術をもとにして集団内での役割が決定されることになっている。つまり、スポーツ技術の獲得過程が多様であり、その技術にまつわる情報もまた個人的な要因が多くを占めているということができる。

②大正後期～昭和30年代（技術の分析：社会的役割による技術の習得）

学校に伝えられた当初は「遊び」としての要素が強かった野球も、次第に技術の高度化に向けて真剣に取り組むべきものへと性格が変わっていった。

第１に、スポーツが学校間の覇権争いに利用されることにより、スポーツにおける勝敗が重要な意味を持つようになった。それにともない、勝利を得るための技術の高度化に価値が置かれるようになった。

校友会に組織された運動部はスポーツの普及に大きく貢献したが、学校の代表としての役割や期待を担わされるようになり、勝利至上主義を信奉する運動部も多くなっていった。

第２に、スポーツが行われる主な場が学校であったことから、スポーツに教育的意味が付与され、スポーツを通した人格形成や規律訓練という「鍛錬主義」が広まっていった。そのころの一高では、キャッチボールは「単なる『球』の遣り取りではなかった。それは『魂』の投捕」であり、打撃は「人格の打撃」であった（藻岩 1935：140-143）とされるように、当時の野球が、単なる遊びや学校間の争いのレベルを超えて、人格形成と結びつけられていたことがわかる。

学校において、スポーツは、運動部だけでなく、正規の教育課程を通しても、「鍛錬」の手段として用いられてきた。

第３に、こうした競争主義と鍛錬主義に支えられ、ひたすら技術の高度化に取り組むものとしてのスポーツが、教育組織を通して普及されていくことで、そうしたスポーツのあり方が正当化されていった。1902（明治35）年頃から、ナンバースクールを中心とした高等教育機関において組織化されたスポーツが全国的な広がりを見せていくが、その過程で、校友会組織に位置づけられるフォーマルなスポーツ集団としての学校運動部の形態と、文部省の教育方針が同時に伝播されていった。

スポーツ集団の上部組織としての学校という枠組みとそれを統括する、国家および全国的競技団体の繋がりが強化されることにより、集団全体での達成主義が確立されることとなる。それと同時に、国際化が進むことにより、科学主義がスポーツに取り入れられ、技術の科学的分析が行われるようになる。つまり、それまで個々の秘密であった技術の獲得過程が、客観化され、公開されていくということになる。

③昭和40年～現在（技術の一般化、明示化：関係性の重視から結果の重視へ）

1964（昭和39）年の東京オリンピックへ向けて、日本体育協会を中心に開始された青少年運動の推進の一環として、スポーツにより青少年の育成を行っていこうとして、スポーツ少年団が設立された。この頃になると、スポーツを子ども期に普及しその教育的効果を拡大しようと

する動きが出てくる。その中心にあったのは、やはり学校運動部であった。

戦後の学校の運動部は，長いあいだ教育課程の一部門である特別教育活動として位置付けられてきた。そして，学習指導要領の改訂［中学校昭和1969（昭和44）年，高等学校1970（昭和45）年］によって，必修クラブが誕生し，従来のクラブ（部）活動は教育課程の内容から除かれるという時期もあった。しかし，1977（昭和52）年の中学校指導要領の改訂，1978（昭和53）年の高等学校の学習指導要領の改訂において，運動部活動は再び学校の教育活動の一部として明確な位置付けが示されることになる。その後，クラブ活動の一部または全部の履修を部活動で代替することができるという「あいまいな」取り扱いがなされていくが，1997年の教育課程審議会「中間まとめ」によって，「部活動がより一層適切に行われるよう配慮しつつ」クラブ活動が廃止される方向性が打ち出され，2002年度から完全実施された改定指導要領に至って必修クラブの時間がなくなってしまう。そうして，部活動での教育的意義がよりいっそう求められるという方向性が明確となってきた。

1996（平成８）年の調査（文部科学省）では、中学生の部活動加入率は、73.9％で、高校生では49.0％となっている。また、1997（平成９）年には保健体育審議会の答申として、「運動部活動は、学校教育活動の一環として行われており、（中略）スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である」ことを明示し、体力向上や健康増進に加え、「学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成する」といった自活的・自主的といった人格の育成や協調性、連帯感といった社会性の育成というように集団内における関係性の側面の重視を明示的に示している。

また，構造的な変容では、東京都教育委員会の調査（2004年）によると都立中学校の12.8％（83校），都立高校の25.9％（50校）において合同部活動が実施されている。全国的には高校で454校が合同部活動を実施しているという現状がある。その原因として，部員数の減少や学校の小規模化，指導者の高齢化，専門性の追及というものが挙げられている（それに対応すべく外部指導者の登用などが試みられている）。しかし，その一方で，今でも「指導の過熱化や勝利至上主義的傾向」という指摘も強くなされている。つまり，スポーツとの関わりの希薄化と，スポーツにおける「勝敗」への過剰なまでの没入，という二極化をここでも見て取ることができる。

子どものスポーツへと重点が移ることにより、教育的意義（人格、社会性の育成）が明示的に示され、スポーツ集団内における人と人との関係の側面が重視されてきていることがみてとれる。

２）学校運動部の変遷と秘密の変容

これまで、集団の関係性と秘密への視点から、学校運動部と補足的にスポーツ少年団の成立過程を見てきた。我が国のスポーツ集団の特性を、関係性と秘密性から区分していくと、次のように区分することができる。①スポーツの導入期である明治初期から大正期、そして、②各種競技連盟および全国的な大会が開催され組織的に発展する大正期後期から昭和30年代、③東京オリンピック（1964年）によるスポーツの高度化と大衆化が進み、子どものスポーツ集団が組織化してくる昭和40年以降から現在という区分である。

明治初期のスポーツ集団では、スポーツ技術は個人の特性（身体特性、経験）によって獲得の度合いが異なり、さらに、その技術をもとにして集団内での役割が決定されることになっている。そこでは、「インフォーマルな」、「常連の集まり」としてのスポーツ集団が形成されており、

それぞれの集団で個別にスポーツ活動が行われていた。そこでは、スポーツ技術をもとにした役割決定がなされていることから、スポーツ技術の獲得過程に「秘密」が維持されているとみることができる。

大正後期になると、スポーツ集団の上部組織としての学校という枠組みとそれを統括する、国家および全国的競技団体の繋がりが強化され、集団全体での達成主義が確立され、同時に、国際化、科学主義がスポーツに取り入れられ、技術の科学的分析が行われるようになる。それが東京オリンピックとして具現化されるに至った。この期には、それまで個々の秘密であった技術の獲得過程が、客観化され、効率的・合理的な練習方法として公開されてきた。

昭和40年以降、部活動の隆盛やスポーツ少年団の設立など、子どものスポーツへと視点が移ることにより、教育的意義（人格、社会性の育成）が明示的に示され、スポーツ集団内における人と人との関係の側面が重視されてきていることがみてとれる。

20世紀後半の我が国では、「子どもに専用の囲い地を用意し、それを量産した時代」（本田2009：152）となることにより、スポーツへのかかわり方も、低年齢化し、学校運動部や学校化したスポーツ少年団、スポーツクラブでの参与が隆盛を極めるようになってきたといえる。また、本田は、学校を「近代効率主義の産物である」とも指摘する。「教育＝学校教育」という考え方が浸透し、さらに、子どもたちには「（学校という）人工的な場所にしか、『居場所』も『成長の場』も無くなった」と分析している。学校を基盤とする、子どものスポーツ集団にも同じような視点を取ることができるのではないだろうか。また、大人にとって子どもとは、「ともに生活する仲間であることを止め、安全と成長の保証される相応しい場所に囲い込んでおく存在と化した」との視点も、子どものスポーツ集団に共通するものとしてとらえることができる。

表１．これまでの学校運動部の特性

	（明治初期～）	（大正後期～昭和30年代）	（昭和 40 年～）
理念レベル	個別主義	全体主義（達成主義）	全体主義（結果主義）
関係レベル	個別（集団）	全体（集団）	個別（個人）
感覚レベル	集団内での共有	競技レベル別での共有	個別 （個人主義）
秘密	秘密の維持 （型、技の享受）	秘密の公開 （技術の分析）	秘密の解体 （技術の一般化、明示化）

５．スポーツ集団の変容と「秘密」の縮小

秘密と公然たるものの連続した入れ替わりをもつ世界として、弓道の世界をとらえているが、それとは対照的な構造を有しているのが、現在の学校運動部やスポーツ少年団であるといえる。そこでは、教育的意義や専門性が求められ、科学的トレーニングや体力の科学的認識に示されるように、近代効率主義に支えられた公然たるものを中心とした組織となっている。

これらのスポーツ集団の中で、秘密を維持するものとして、技術と関係性の２つの側面を取りあげ、個人的な分化の状態の程度との関わりからスポーツ集団の特徴をみていく（図２）。

まず、①技術レベル、関係レベルともに個人的分化の状態が強い集団（活動集団）が考えられる。これは、スポーツ活動を重視する集団であり、武道など段階級に準じた集団であり、そのことで縦の関係が明確にされている集団と考えることができる。次に、②技術レベルでの個人的分化の状態が強く、関係レベルでは弱い集団（全体主義的集団）である。これは、関係性による個人的な分化の状態が弱く、全体主義的な集団と考えられる。つまり、集団全体で目標達成をめざす集団である。③関係レベルでも、技術レベルでも個人的な分化状態が弱く、非常に同質性の強い集団（交友集団）である。ここでは、スポーツ活動以外に重点がおかれ、交友を重視されることになる。そして、④技術レベルでの分化は弱いが、関係レベルでの分化の状態が強い集団である（個人主義的集まり）。自主的に集合し、それぞれの課題を追求する集団である。同じような技術レベルで集まり、その中での各々の目標達成（結果）を目指す結果主義的と考えられる。

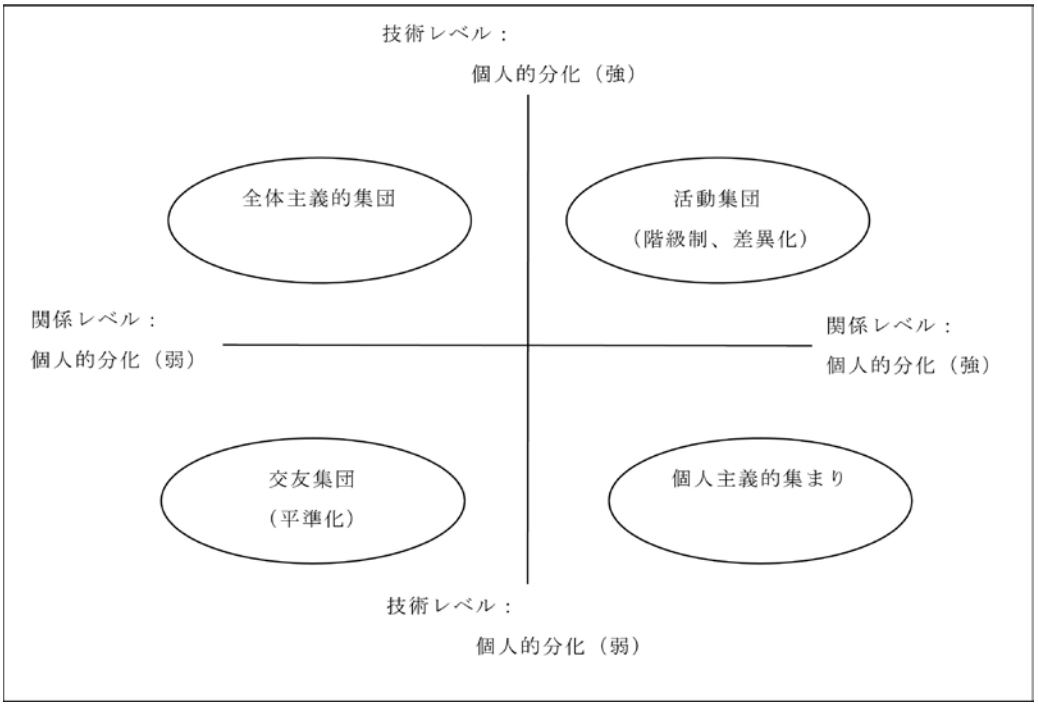

図２　各レベルの個人的分化

学校運動部をはじめスポーツ集団の内部で起きるコンフリクトのひとつに、技術レベルでの個人の分化か関係レベルでの個人の分化かという問題での衝突があげられる。しかし、いずれにおいても公開性を重視した上での変容であるため、関係レベルでの個人的分化は低いまま技術レベルの重視へと移行することになる。つまり、技術レベルで組織が再区分され競技性を重視するのか友好性を重視するのかといった変容である。スポーツの技術レベルで集団が区分されると、同質の技術レベルにて集団化され、技術レベルでの個人的分化も低く抑えられたまま

となるのである。

これは、教育的配慮によるスポーツ集団内の役割の平等性（民主主義的）が重視され、技術の側面においても科学的分析がなされ、技の分析、公開による技術の客観化がすすめられたことによる同質化、平準化がなされたことによるものだと考えられる。

このスポーツ技術には「生理・心理的、バイオエナジェスティックス、バイオメカニックス等に関する諸法則に基づく結合の法則が存在」する「因果論的構造」と「伝統的な慣習や明示的、黙示的スポーツルール等、規範としての整合型によって支配される目的論的構造」の二つの側面があるという（菅原1984：277）。菅原は、「極端に技術の合理性の追求に傾くときには、全体としての因果論に傾斜し、人間性が軽視され、（…略…）スポーツの破壊にまでつながる」と指摘する。

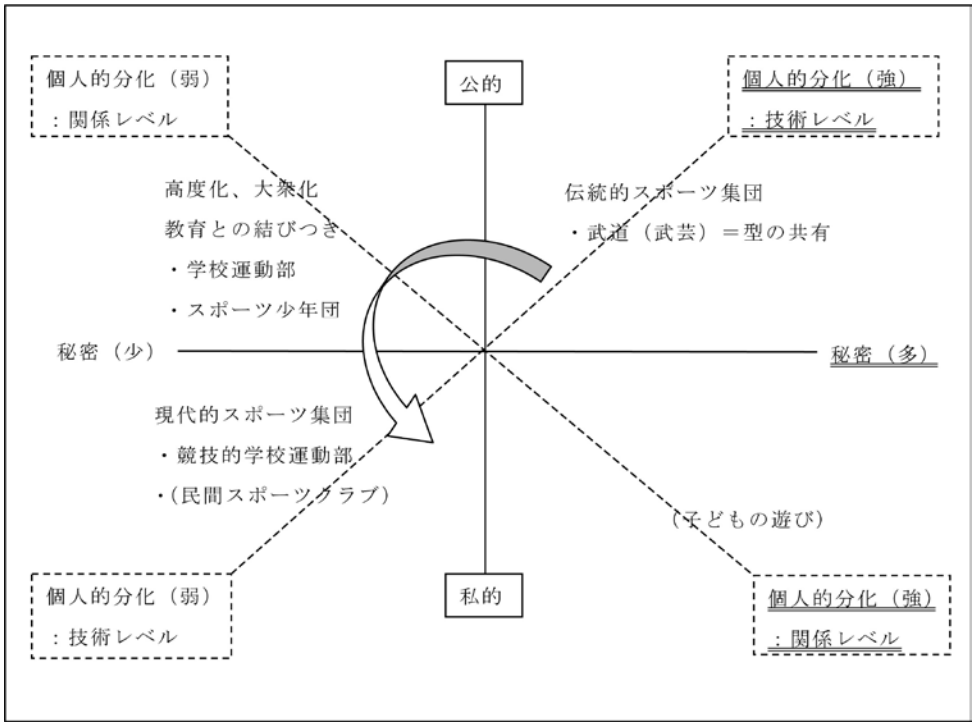

図３　スポーツ集団の変遷

達成主義から結果主義へと移行する時期には、技術やトレーニングといった、スポーツの取り組みの「合理化」が推し進められてきたことにより、それまで個人的な「技」であったものが、一般的な「技術」へと変容してきた。この流れが確立されることにより、課題達成から結果の獲得へとその目標を変容させることとなった。つまり、どれだけ効率的に課題が達成できるかが重要となってきたのだ。同時に、そのことは、スポーツ集団の持つ「秘密」を解体し、スポーツとの関わりの初期の段階で、結果を予測することが容易となり、体力・健康づくりのためのスポーツ活動といったものから、進学のための部活動参加といった「○○のためのスポーツ」という意味をつくりだしているのではないだろうか。言い換えると、「スポーツに費やす

時間がない」、「他にしたいことがある」「面倒」「疲れる」「忙しい」「下手」「嫌い」「やりたいと思うものがない」といったスポーツを行わなかった理由をつくり上げているのは、この「秘密」の解体をもたらしたスポーツ集団の構造に結びついているということができる。

同時に、学校運動部では、縮小したものの一部で、秘密が維持されている側面もある。2006（平成18）年の春の高校野球全国大会で決勝戦まで進んだ、長崎県立清峰高校にみることができる。監督の吉田氏は強さの秘訣を聞かれると、「だってひと言、ふた言ではこたえようがないんですよ。いろんなことが積み重なってきての結果ですから（矢崎2006：103）」と結果につながる明示的な要因を挙げることを拒んでいる。また、間近で見守る野球部ＯＢも「いっつもそばで見ている私らにもなんでそんなに強いのかわからんとですよ。ホントに吉田マジック」と秘密の存在を垣間見ることができる。これらの秘密の雰囲気をかもしだす要因として、練習に自然環境を生かしたトレーニングがある。「３～７キロある丸太の木片を抱えてのランニングや近くの公園にある石段を使ったダッシュ－あるいは『真剣に数を振るのがモットー』という気の入った素ぶり」といったものである。「自然」の要素や「真剣に」といった個々の主観的要素が取り入れられることにより、獲得されたスポーツ技術の中に、他者から見通すことのできない「秘密」の部分が生成されてくると考えられる。

６．まとめ

本報告では、スポーツ集団における意味の伝達過程に存在する「秘密」に焦点化し、これまでのスポーツ集団の特性から検討を行ってきた。そこでは、スポーツの中に位置する、スポーツ「技術」とスポーツの周辺に位置する集団内の「役割」を取り出し、それぞれの個人的分化の度合いとの関係を明らかにした。

また、個人的分化の度合いと秘密の存在から、これまでのスポーツ集団の構造をみることで、①伝統的集団（型といった公的な秘密性を帯びた技術、技による個人的分化）－②学校運動部、スポーツ少年団（関係レベルの重視、個人的分化の低い集団＝全体主義集団：達成主義）－③競技運動部、民間スポーツクラブ（技術レベルを重視するが、その為、同質集団となる、個人的分化の低い集団＝個人主義：結果主義）－④これからのスポーツ集団（総合型地域スポーツクラブなど）という分類を行うことができた。

スポーツ集団のもつ魅力という側面に焦点化することで、「時間がないから」、「運動・スポーツより他にしたいことがあるから」、「面倒だから」、「疲れるから」、「勉強や習いごとで忙しいから」といったスポーツを行わなかった者の理由とされている言葉の意味のするものとして、スポーツ文化の価値の低下を挙げることができるのではないだろうか。日常生活における他の活動と比較され、スポーツよりも勉強（塾など）や他のしたいことに時間を割いているという見方である。そこに関わってくるのが、スポーツ集団に存在する魅力であり、その魅力を支えているのが「秘密」の存在であるといえる。これまで、スポーツ集団への所属により得られる教育的意義（達成感、継続性、協調性など）が明示的に示され、全体主義的に達成されていくことにより、スポーツの意味が平準化されてきた。さらに、スポーツ技術の科学的分析、そしてそれを受けた指導において、スポーツの技術が公開されてきた。これにより、結果との結びつきを容易に予測することができ、費やす時間の妥当性が決定されてくる。

このように考えると「近代効率主義」の枠組みの中で生成、伝達されてきたスポーツの意味が、子どものスポーツ参与（継続）の二極化という問題として現れてきているとみることができる。

小泉信三（2008：152）は、「不可能を可能にする体験こそスポーツがわれわれに与える最も貴重なものであると思う」という考えを持っていたが、この不可能性と可能性を繋げているものが「秘密」の存在である。この秘密の存在を左右するものとして、指導者（教師、師）と成員との関係が挙げられる。「秘密」の存在が大きくなるのは、ヘリゲル（2002：81）が「自分の自由に処理できる最も秘密な、内面的な仕方で弟子を助けるのである」というときの関係、あるいは、教育者の大村はま（1987：21）が「研究している先生はその子どもたちと同じ世界にいるのです」というときの関係が構築されたときである。

今後は、具体的なスポーツ活動（技術）の伝達過程において公開と隠蔽がどのような割合となっているのか、そして、参与者（子ども）は、そこに、どのような個別の意味を見出しているのか、明らかにしていくことが課題となってくる。

本研究は、平成22年度科学研究費補助金若手研究（B）「子どもの自己変容をもたらすスポーツ環境に関する研究」（課題番号22700640研究代表者　清水一巳）の一部である。

《　注　》

スポーツ技術とは、

付け加えると、「スポーツの目的の達成や課題の解決を目ざし、それに必要な器械・器具等の道具を使用するとともに、自然の法則、バイオメカニックスに関する法則、スポーツルール等の制約を受けながら展開される、合理的、合目的的、経済的な一種の運動経過であり」、その構造について「客観的に理解できる意味の表明を可能にしている」ところをシンタックスになぞらえている。また、「武道にみられる型」や「スポーツの基本技術」、「基本的に重要な戦術や戦法」といったものも合目的的であり、合理性、経済性に優れている場合、定型化され、伝達されることになるという。（菅原1984：50-53）

《参考・引用文献》

アルフレッド・シュッツ，桜井厚訳，1997，『現象学的社会学の応用』御茶の水書房
荒井貞光，2003，『クラブ文化が人を育てる－学校・地域を再生するスポーツクラブ論』大修館書店
ゲオルグ・ジンメル，居安正訳，2006，『社会学（上巻）』白水社
ホイジンガ，高橋英夫訳，1988，『ホモ・ルーデンス』中央公論社
亀山佳明，2001，『子どもと悪の人間学－子どもの再発見のために』以文社
菊幸一，1993，『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学』不味堂出版
小泉信三，山内慶太他編，2008，『練習は不可能を可能にす』慶応大学出版会
文部科学省，1997，『生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について』（保健体育審議会　答申）
文部科学省，1997，『運動部活動の在り方に関する調査研究報告書』（中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議）
日下裕弘，1996，『日本スポーツ文化の源流　成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究－その形態および特性を中心に－』不味堂出版
本田和子，2009，『それでも子どもは減っていく』筑摩書房
NHK放送文化研究所，2006，『日本人の生活時間・2005』日本放送出版協会
中村敏雄，1996，『日本的スポーツ環境批判』大修館書店
日本スポーツ少年団，1992，『スポーツ少年団「理念」の再確認と今後のあり方について』
日本体育協会，1963，『日本体育協会五十年史』

西村清和，2005,『遊びの現象学』勁草書房
藻岩豐平，1935,『一高魂物語』本郷區向ヶ岡　第一高等學校　菅沼重埜
オイゲン・ヘリゲル，稲富栄次郎、上田武訳，2002,『弓と禅』福村出版
大村はま，1987,『教えるということ』共文社
大橋美勝，2001,「スポーツ少年団の理念と総合型地域スポーツクラブ」『岡山大学教育学部研究集録 118』岡山大学教育学部学術研究委員会編
佐山和夫，1998,『ベースボールと日本野球』中公新書
SSF笹川スポーツ財団，2010,『青少年のスポーツライフ・データ2010』笹川スポーツ財団
菅原禮，1984,『スポーツ技術の社会学』不昧堂出版
東京都教育委員会指導部企画課：『平成16年度部活動調査』，東京都
上杉正幸, 1984,「スポーツの高度化の現状と問題」佐伯聰夫編,『スポーツ社会学講座３現代スポーツの社会学』不昧堂出版
矢崎良一他，2006,『永遠の球児たち－甲子園の、光と影－』竹書房
山本清洋，2005,『子どもスポーツの意味解釈』日本評論社
財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団，2006,『ガイドブック「スポーツ少年団とは」』